

〈篠原一先生をしのんで〉

弟子から見た篠原先生

前北海道大学教授

田 口 晃

田口と申します。「弟子から見た篠原先生」というタイトルでお話するわけですが、実は私は弟子を代表しておりません。やはりずれた変則的な経路で、先生の弟子にさせていただいた人間です。ですから、こういう外れた奇妙な弟子もいる、と言う風にお聞きください。あるいは先生が若い世代の人間を受け入れる懐の深さをしめす好例と考えて頂いてもよろしいかと存じます。

私は、大学には最初経済学部に入りました。当時人気の高かった比較西洋経済史を学び、日本の「近代化」について考える機会を得ましたが、新潟県の田舎で育ち、そこでの生活を振り返ってみると、経済学・経済史だけでは解けない、日常的な人間関係・「微視の権力」の問題が存在すること気がきました。そんな折、一九六八年に篠原一先生が出された『日本の政治風土』を読み、自分が理解し、解決したいのはこういう問題なのだと思います。思い至り、政治学を学びたいと思つたのでした。加えてその後、大学闘争をノンポリとして体験する中で、「民主主義」とはなにかわからなくて悩み、やはりそれを解明するためにも政治学を学びたいという思いを強めました。

そこで、七一年に法学部へ学士入学し、「ヨーロッパ政治史」の講義を聞いた後、三年生の時、篠原先生のゼミに入れて頂きました。「ヨーロッパ政治史」の演習で、H・ブリューニングというワイマール共和国末期のドイツ首相の回想録がテキストでした。ドイツ語の分厚いテキストにも驚きましたが、平然とそれをこなすゼミ生は、意見を戦わせれば、多士済々で、経済学部との違いにカルチャー・ショックをうけました。今日ここに何人かお見えになっています。

私はと言えば、民主主義をもつと学びたくなり、大学院に進もうと考え、テーマが民主主義の比較だから「比較政治学」と勝手に決め込んで、受験しました。ところが、法学部では「比較政治学」はソ連政治史と定められ、現に浜内譲先生がソヴェート政治史の講義をなさっていたわけでした。従つて、民主主義の比較といったテーマを掲げて、先生方を困らせるだけだったのです。今でも面接試験で浜内先生が困惑されていたことを覚えています。そんなことも知らないのんきで世間知らずの学生に対し、篠原先生が「比較政治学」の指導教官の役を買って出てくださいました。

はぐれ者が篠原先生に拾っていただいた、というわけです。今でも有り難く思っています。

さて、大学院時代の先生の研究指導・論文指導はと言えば、弟子の狭いテーマに対し、広い視野から展望を示して、勇気を与えてくださるものでした。論文が書けずに暗い気持ちで先生の研究室に入つても、出てくるときにはすぐにも論文が書けそうな気がして意気軒昂となるのです。尤も、それですらすら書けるというわけでもないのです。それともう一つ指摘しておくべき特色は、現状の中に萌芽的に登場している問題をいち早く、かつ鋭くキャッチし、それを最先端の政治理論で分析して見せる驚嘆すべきセンスと能力です。本当に目の前が突然広がり、人間の自由と平等をひるげる展望が現れてくるという経験を何度かさせて貰いました。まばゆいばかりの存在であつたと同時に、お話について行くのが大変なこともありました。

大学院に入って暫くのころ先生は「がん」を患われ、入院治療と言うことがありました。弟子たちも随分心配しましたけれども、幸いに回復され、丸山ワクチンを愛用されて今日までこられたことは皆さん御承知のとおりです。退院された最初の演習の際、初めてノートを使われた。それまでは御自分の頭の中で全て整理されていたのです。治療の副作用で記憶力が落ちたからだとおっしゃっていましたが、もう一つ、先生が新たな研究分野に乗り出そうとされたこともノートを必要とされた理由かもしれません。つまり、小国も視野に入れたヨーロッパ政治史研究という前人未到の分野

です。これは、後に『ヨーロッパの政治』という名著・大著に結実する、先生の研究生活後半の大きな研究計画でもあったのです。あるいは、中欧小国の研究をしたい、という私を指導教官として引き受けられたことも与っていたかもしれませぬ。ちなみに、一年ほどで再びノートが不要になったのでした。

大学院のゼミで、A.Lijphartの『Constitutional Democracy』論を紹介したのがきっかけで、雑誌『思想』にヨーロッパ小国研究の学会動向を書かせてもらうことになった時、訳語として「多極共存型デモクラシー」という輪郭のくつきりした表現を考えて下さったのも篠原先生でした。今では政治学界の共有財産になっていますね。

その後、私は縁あって、一九七七年から北海道の大学で教えることとなりました。「ヨーロッパ政治史」を担当し、先生の講義の私なりの幼稚なノートを土台に稚拙な講義を行いました。私の場合、教師としては殆ど失格に近く、今でも卒業生諸君には申し訳なく思っています。それでも篠原先生のような教授法・指導方法にあこがれていろいろ試みてはみたのです。

私が北海道に移る直後から、先生が主催された連合政治の共同研究が始まり、私はオランダ担当となりました。そうして八二年夏に初めてオランダの王立図書館と文書館を訪れ、その年いっぱい仕上げた原稿を留学先のウイーンから送った。先生の共同研究は、一九八四年に『連合政治』全二巻にまとめられました。これも先駆的なお仕事で、そこに加えて貰ったことを誇りに思い起こし

ます。また、先生がネオ・コーポラリズムに関心を抱かれていたので留学先から、当時ネオコーポラリズムが最も良く機能しているとされたオーストリアのコーポラリズム研究に関する著書をお送りし、喜んでいただいたのも思いだして嬉しいことです。

ところで、私は先生の市民運動、市民社会をめぐる御発言とご著書に触発され、八〇年代に札幌でも市民と市政の「土曜協議会」を幾人かの人次と立ち上げました。札幌市議の川口谷正さんを窓口にした様々な市民運動と札幌市行政との話し合いの場なりましたが、世間知らずの私にとってありがたい実学の間でもありました。

さらにここ二〇年ほど行っているNPO推進会議やサポート・センターの仕事も、実は先生に教えて頂いたものです。一九九四年に東京でお会いした時、「NPOと云うのがあるけど知ってる」と。何でも東京が最初では分権もへちまもなからうと判断した北海道の人間たちで立ち上げました。「市民科学研究機構」（篠原先生と親しかった札幌地区労の重野広志さんが立ち上げ、今日お見えの神原勝さんが中心に樹立した組織です）で知り合った佐藤隆さん、小林重信さんや、生活クラブ生協の杉山さかえさん、さらに今年まで札幌市長をつとめた弁護士の上田文雄さんがそうした同志です。北海道では、富良野演劇工房が日本最初の方々に教えられ、影響を受け、共鳴して市民運動の一翼を担って見たわけで、これは日本全国で市民運動を進められた多くの方々と同様だと思えます。

重野さんが札幌での生活を豊んで長野に帰られる直前に、篠原先生が御来札の機会があり、私のお二人がお会いになる、ということもありました。夏のさわやかな好天の日で我が家のベランダでお二人が懐かしそうにお話しているのを、私はもっぱら裏方兼聞き役で過ごしました。これも懐かしい思い出です。

『市民の政治学』出版記念パーティ（二〇〇四年）のことです。近況報告でなかなか研究が進まないと嘆く私に、先生は笑いながら「田口くんは怠け者だから」とおっしゃった。ところがそれがなんとも嬉しくて私自身も笑い出してしまったのでした。なんで「怠け者」といわれて嬉しいんだろう、と考えた時に、私はこの人、この先生の弟子なのだとしみじみと納得しました。「たとひ、法然上人にすかさずまひらせて、地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ」という境地には、勿論、到底およびませんが、方向はそれに近い感じなのです。この師とめぐり合い、二〇世紀後半から二一世紀にかけて同時代を生きていることが出来たのは幸運だったという思いに満たされながら、今日篠原先生とお別れしたいと思えます。

以上、私的な体験を皆様の前に御披露した格好になり、公的な集いにそぐわない点もあったかもしれませんが、その点は御寛恕頂きたいと思えます。（本稿は、二〇一五年一月七日の「お別れ会」でのスピーチの原稿に手を加えたものである。当日は時間の関係で全体の三分の一程しか話せなかったものを復元し、さらに一部加筆した）

へたぐち あきら